

そして、子どもが表出する性化行動やその他の症状を、子どものサインとして認識することで、ケアワーカーも適度な距離を持ちながら子どもに接することができると考えられる。

(3) 子ども間の施設内性的虐待の発生と予防

本研究では、施設ケアワーカーによる子どもへの性的虐待の発生と予防に関して研究を進めてきたが、性的虐待を受けた子どもの示す性化行動は、同じ施設に入所する男児に対しても刺激となり得る。実際に、性的虐待群の中には施設の入所男児からの被害が8件含まれていた。

施設に入所している男児は、入所以前に性的虐待（主に目撃や過剰な性的刺激など）を受けている可能性も高く、男児自身の示す性化行動が女児の性化行動と刺激し合い、より性的加害・被害に結びつきやすいことも考えられる。

入所の時点で子どもから生育歴を聞き取り、虐待歴を理解した上で、日常のケアに取り組むことが子ども間性的虐待の予防の一端となると考えられる。

E. 結論・課題

本研究では、性的虐待の影響として、性化行動が顕著に現れ、その他にも「自信の欠如」、「注意/多動の問題」、「学校不適応」、「感情抑制/抑圧」、「性的逸脱行動」、「希死念慮/自傷性」、「食物固執」、「感情調整障害」、「危機項目」などの行動が対照群よりも有意に高く、これらの行動が施設での生活を不安定にしていることが分かった。また、施設のケアワーカーが、性的虐待を受けた子どもの示す、「異性との対人距離の近さ」や「性化行動」のケアに困難性を感じていることも明らかになった。

性的虐待を受けた子どもの養育にあたるケ

アワーカーの心理傾向としては、子どもを理解しようとするほど「この子を理解できるのは私しかいない」といった救済者ファンタジーや、他の職員を遠ざけてしまう傾向が見られ、子どもの年齢が上がるにつれて、疲労・疲弊、被害的認知、自己の欲求優先傾向が見られた。また、男性ケアワーカーにおいては、これらの傾向に加え、思春期の女兒に対して擬似恋愛感情や嫉妬心を抱く傾向も見られた。

近年、施設職員の離職率は高く、勤務年数の浅い若いケアワーカーが子どものケアにあたることが多い。専門的なトレーニングを受けていない若いケアワーカーは、性的虐待を受けた子どものケアを行う際に、子どもの性化行動に容易に刺激され、救済者ファンタジーや擬似恋愛感情といった、性的な意味合いを含む逆転移感情を抱きやすく、不適切な性的接触に繋がる危険性がある。

今回の調査で性的虐待疑い群として挙げられた子どもたちは、性化行動などから性的虐待が疑われるものの、開示がないといった理由で、性的虐待疑い群に分類されていた。これらの子どもたちは、性的虐待群よりもACBL-R得点が高い傾向が見られ、虐待に対する認識の低さや、言語化できていない状況が、行動化に繋がっていることが推察された。性的虐待の影響として、性化行動が現れることを理解していても、対照群や性的虐待疑い群に属している「潜在化する性的虐待群」の子どもたちの起こす性化行動は、虐待の人間関係の再現性とあいまって、異性のケアワーカーを知らず知らずのうちに巻き込んでしまう可能性がある。

現行のシステムでは、施設入所以前の一時保護時に、子どもの虐待歴などの聞き取りが不十分であり、自ら被害を開示することの難しい幼少期の子どもの虐待歴が不明な場合が多い。入所時の情報が不十分な子どもに対しては、子どもの理解も不十分となり、ケアが行き届かなくなる可能性がある。したがって、

児童相談所における子どもへの聞き取りを、実施していくことが求められる。

また、性的虐待を受けた子どもからの開示のみに頼るのではなく、子どものサインとして現れる様々な行動や症状にも目を向けてケアを行うことで、いつか子どもが自分の身に起きたことを認識したときに、安心して開示できる環境を提供できると考えられる。

これまで述べてきたように、様々な行動化や症状を呈する性的虐待を受けた子どもの施設入所は、年々増加している。施設内性的虐待を防止するためにも、施設ケアワーカーへの研修とスーパーヴィジョン体制、および性的虐待を受けた子どもへのケアプログラムの確立が早急に求められる。これに加え、他の被虐待児を含め、施設ケアワーカーの職務内容はより高度な専門性が必要とされ、ケアワーカーの配置についても、早急に増員を検討する必要性が示唆された。

F. 総括並びに提言

以上、性的虐待の調査報告に加えて、本年は奥山研究班関係他を交えた施設内虐待に関する合同検討会における実践報告、研究報告、及び研究討議により得た知見を要約、整理した。

【施設内虐待への対応の現状と課題】

～施設内虐待に関する奥山研究班合同検討会議より～

現在まで児童養護施設内に於ける子どもへの権利侵害が発生した施設などに何らかの介入、援助または施設内虐待に関し、調査研究等の経験を持つ、児童精神科医、大学研究者、心理臨床家、ソーシャルワーカー等が一同に会した研究から多くの知見を得ることができた。ここにその一端をあげ、報告する。

1. 施設内虐待への介入・援助事例から

これまで、様々な地域で起きた施設内虐待

が起こった施設への行政単独での介入事例では、多くに改善報告が行われ、その結果として法人理事会の改編、施設長の交代、加害職員の処分等に加え、様々な職員が子どもへの処遇場面での「……してはいけない」式の禁止条件の羅列の約束事で終始していた。結果として、施設内での不適切な養育実態は何ら改善しないまま、事件が再燃するというケースが発生している。こうした中で、介入、援助が比較的うまくいき、その後、施設内の子どものケアが安定継続している事例について検証すると、事件が発生後、行政の強い権限で改善勧告はあるが、それを民間ボランティアな団体(弁護士、医師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、社会福祉協議会職員など)行政の代行としての介入、援助が功を奏している。

特に多くの場合、マスコミ報道にさらされた施設現場では、職員の自信喪失、疑心暗鬼、自己嫌悪が渦巻く一方で、子どもへの対応が行き届かず、子どものアクションアウト、攻撃性、不満が噴出、混乱状態となって対職員への暴力、多くの児童の不登校などが続出する場合が少なくない。外部からの強力な支援、職員集団内部へのアクションサポート、エンパワー等が必要となる。そのために民間のボランティアな支援チーム(医師、ソーシャルワーカー、臨床心理士等)による子どもと職員へのメンタルヘルスケアを継続的に行い、日常生活基盤の回復を進め、子どもと職員間の関係修復を図ることが必要不可欠であるという報告がされている。

以上の支援の経過から、施設内虐待については、

- ① 施設関係者だけでは解決不可能である為、外部から公私が協働した強力な介入・援助を導入
- ② 当事者(加害者)の処分の一方で、残った職員へのサポート(メンタルヘルス及びエンパワーメント)により、自信や意欲

を回復させることが重要

- ③ 子どもの日常生活基盤を整えることによる職員の自信回復、また各種研修を通じた専門性の向上により子どもへの職員の安定した対応援助の姿勢がもたらす子どもの落ち着き
- ④ ①から③を踏まえた介入、援助の結果が永年の旧態然たる施設構造改革をすすめる、子ども権利擁護を基盤とする新たな養育文化を構築する。

2. 施設内虐待の類型

施設内虐待の殆どは、マスメディアによる報道を契機に顕在化してきた。

平成7年を皮切りに施設内虐待は経年毎に増加の途にある。施設内虐待の類型としては、

- ① 措置費や子どもの生活費の流用など経済的搾取(社会資源の私物化)
- ② 人権感覚の麻痺などからくる支配的管理
- ③ 施設内ネグレクト・ケアの不在
- ④ 職員の自己コントロールの喪失による体罰
- ⑤ 施設内性虐待
- ⑥ 養育放棄としての安易な措置変更 などがある。

また、施設内性虐待の大きな背景、要因として福祉原理の問題としての劣等処遇論が基本的人権を確定にし、その延長線上に施設制度、システムとして虐待があると考えられる。

3. 諸外国における施設内虐待の歴史的、文献的考察

1940～1950年代のボウルビィの研究によるホスピタリズム(施設病)に関する研究に端を発し、これまで様々な研究が報告されている。欧米のレジデンシャルケアの場は、我が国のそれと比較してもはるかに人的配置など優位にあるが、いずれの研究においても一般子育てに比較して、施設ケアを受けた子ども

は、学習、情緒障害、多動、非行、無差別的愛着傾向、関係性障害など顕著な課題を有しているとの結果が報告されている。

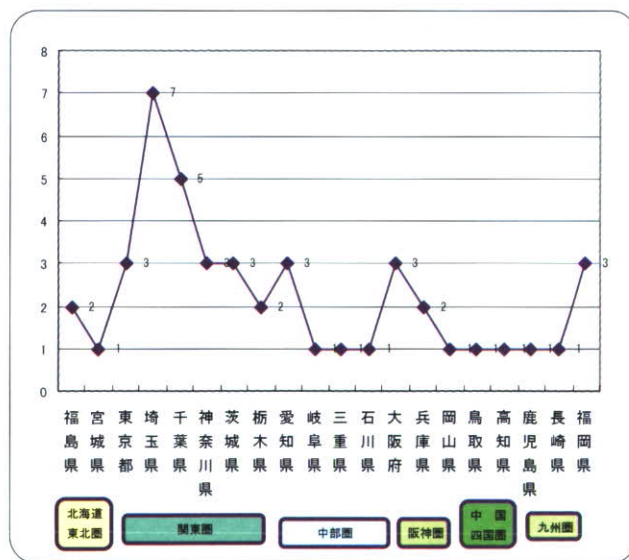
こうした研究の経緯に伴い、欧米では一時保護を除き、社会的養護としての集団養護は、ここ10年くらいの間に5～10%となり、乳児については皆無になっている。

以上の知見と、平成17年度、18年度の調査研究結果をふまえて「施設内虐待の予防と介入及び子どものケアに関する研究」を総括し、下記のように提言する。

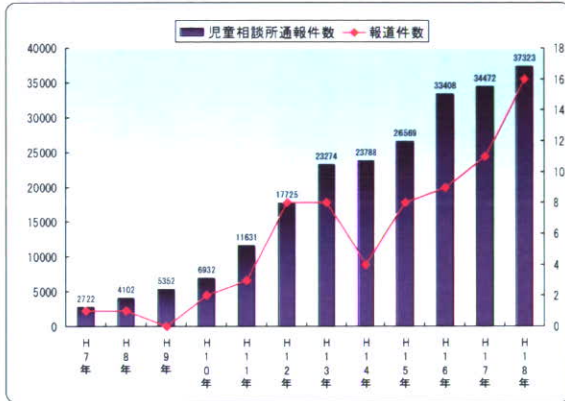
施設内虐待への介入と子どものケア、施設内虐待の予防等の統括並びに提言

「施設内虐待の予防と介入及び子どものケアに関する研究」の3年間を統括するとともに以下のように提言をする。

1. 施設内虐待に関するマスメディア報道の地域別発生件数



2. 家庭内子ども虐待の相談処理件数と施設内虐待報道経年推移

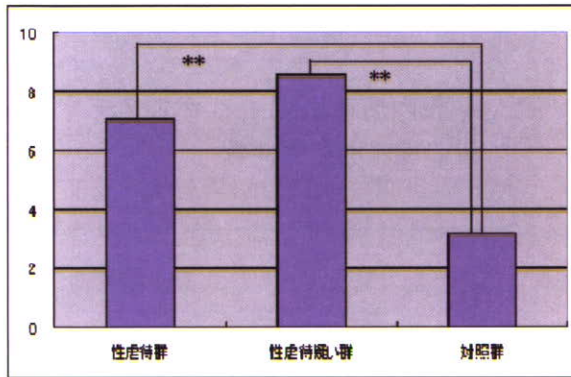


<女性ケアワーカー> * $\lt .05$, ** $\lt .01$

- 性虐待群 > 対照群
- この子がいなければ、もっと楽になると感じる *
- この子さえいなければ私の仕事はもっといい方向に進んでいると思う *
- 対照群 > 性虐待群
- この子の側にいると、穏やかな気持ちになる *

3. 性的虐待を受けた子どもの性化行動と担当職員の抱える心理的傾向

* $\lt .05$, ** $\lt .01$



<男性ケアワーカー> * $\lt .05$, ** $\lt .01$

- 性虐待群 > 対照群
- この子が気持ち悪いと感じる**
- この子を助けられるのは私しかない**
- この子の養育に関しては誰にも口出しして欲しくないと思う *
- この子のことを、実際の年齢よりも高く見てしまう *
- この子と一緒にいると、まるで恋人と一緒にいるような気持ちになる *

4. 施設内虐待の類型及び要因

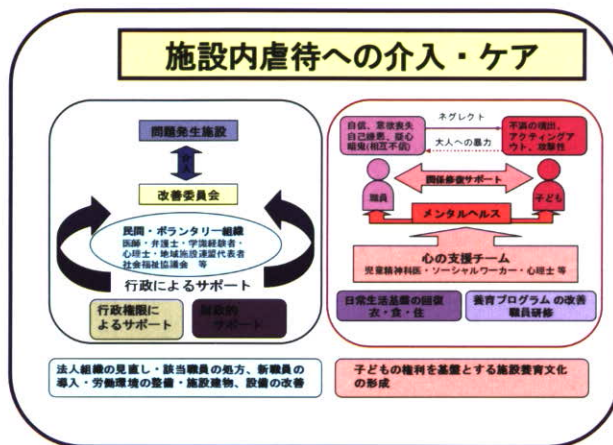
【施設内虐待の類型】

- 経済的搾取：措置費や子どもの生活費の流用
社会的資源の私物化、「家業」としての施設、労働搾取
- 支配的管理と人権感覚の麻痺：
盗聴器、監視カメラの設置、自室軟禁等
- 施設内ネグレクト：ケアの不在、子ども間暴力の放置
- 体罰：職員の専門性の欠如によるコントロールの喪失、反社会的行動への反応
- 施設内性虐待：ケアワーカーと子ども、子ども間
職員の倫理観や専門性の欠如、ネグレクト、アセスメントの欠落
- 施設措置変更：排除、ネグレクト

【施設内虐待の要因】

- 子どもの発達課題
- 施設長、職員問題
- 法人組織をめぐる問題
- 旧態然たる我が国の福祉原理をめぐる問題
- 社会的養護の制度、システムの問題
- 養育理念・理論の欠如～構造問題としての施設文化

5. 施設内虐待への介入ケア



6. 施設内虐待の予防

- 施設サポートのための第三者機関設置
子どもの権利擁護、新しい施設養育文化の構築をめざして
- 施設内虐待防止を視野に入れた福祉サービス第三者評価のあり方
- 子どもの発達課題を明確にするアセスメントと自立支援計画の策定・実施
- 子ども発達権保障を基軸とする養育論の形成

文献

Nadelson CC., Notman MN., Hannah Z et al (1982) A Follow-Up Study of Rape Victims.

Am Jpsychiatry 139. pp. 226 - 1270.

西澤哲他 (2005) 子どもの虐待経験と虐待による行動特徴の評価に関する研究. H16 年度厚生労働研究(子ども家庭総合研究事業) 報告書. 児童福祉機関における思春期児童等における心理的アセスメントの導入に関する研究. pp. 22 - 26.

西澤哲 (2006) 虐待行為につながる心理的特徴について: 虐待心性尺度 (Parental Abusive Attitude Inventory : PAAI) の開発に向けた予備的研究. H17 年度厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業) 報告書. 児童福祉機関における思春期児童等における心理的アセスメントの導入に関する研究. pp. 133 - 144.

Friedrich WN., Grambsch P., Damon L (1992) Child Sexual Behavior Inventory. . Normative and clinical comparisons. . Psychological Assessment. . 4. pp. 303 - 311.

Friedrich WN(1993b) Sexual victimization and sexual behavior in children:A review of recent literature. Child Abuse & Neglect, 17, 59 - 66.

Kendall-Tackett, K. E. , Williams, L. M. , & Finkelhor, D. (1993). The impact of sexual abuse on children :A review and synthesis of recent empirical studies. Psychological Bulletin. 113. pp. 164 - 180.

奥山真紀子 (2002) 家族外性的虐待を受けた低年齢児の症状とその後の経過. 小児の精神と神経. 42 巻. 4 号. pp. 283 - 291.

藤澤陽子 (2006) 性的虐待を受けた子どもの性化行動に関する研究. 明治安田生命研究助成報告書.

篠崎智範 (2007) 児童養護施設職員の共感疲労とその関連要因. 子どもの虐待とネグレクト. Vol.9, No.2. pp. 246 - 255.

表 1-1 各群の年齢度数と構成比

	性的虐待群 (N=159)	性的虐待疑い群 (N=71)	対照群 (N=168)
6～9 歳	21 (13. 2%)	15 (21. 1%)	31 (18. 5%)
10～12 歳	36 (22. 6%)	29 (40. 8%)	47 (28. 0%)
13～15 歳	63 (39. 6%)	17 (23. 9%)	59 (35. 1%)
16～18 歳	39 (24. 5%)	10 (14. 1%)	31 (18. 5%)

表 1-2 各群の入所年齢平均と標準偏差および一要因分散分析結果

性的虐待群 (N=159)	性的虐待疑い群 (N=71)	対照群 (N=168)	分散分析結果	多重比較 (Tukey 法)
10. 0 (4. 0)	7. 5 (3. 8)	7. 0 (3. 9)	F (2. 390)=24. 86**	性>疑い, 対照
* < . 05, ** < . 01				

表 1-3 各群の面会・外出・外泊度数と比率

	性的虐待群 (N=159)		性的虐待疑い群 (N=71)		対照群 (N=168)	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし
面会	90 (56. 6%)	63 (39. 6%)	46 (64. 8%)	19 (26. 8%)	94 (56. 0%)	57 (33. 9%)
外出	67 (42. 1%)	82 (51. 6%)	45 (63. 4%)	22 (31. 0%)	90 (53. 6%)	63 (37. 5%)
外泊	70 (44. 0%)	82 (51. 6%)	40 (56. 3%)	30 (42. 3%)	118 (70. 2%)	44 (26. 2%)
* < . 05, ** < . 01						

表 1-4 各群の生活安定度平均と標準偏差および一要因分散分析結果

性的虐待群 (N=155)	性的虐待疑い群 (N=71)	対照群 (N=167)	分散分析結果	多重比較 (Tukey 法)
3. 88 (1. 71)	4. 38 (1. 67)	3. 20 (1. 43)	F (2. 390)=15. 76**	疑い, 性>対照
* < . 05, ** < . 01				

表 1-5 性的虐待群と性的虐待疑い群における開示の有無

	性的虐待群 (N=159)	性的虐待疑い 群 (N=71)
開示あり	124 (78. 0%)	20 (28. 2%)
開示なし	22 (13. 8%)	43 (60. 6%)
欠損値	13 (8. 2%)	8 (11. 3%)

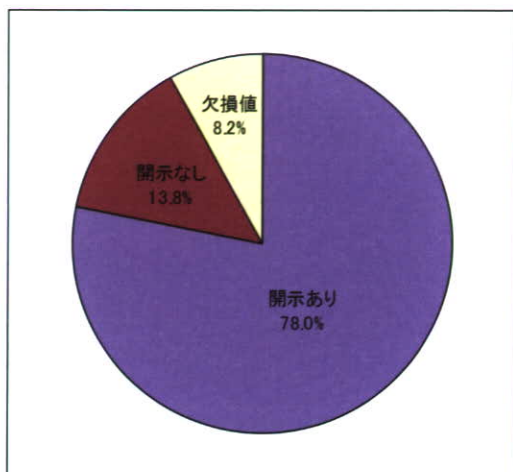


図 1-1 性的虐待群の開示の有無

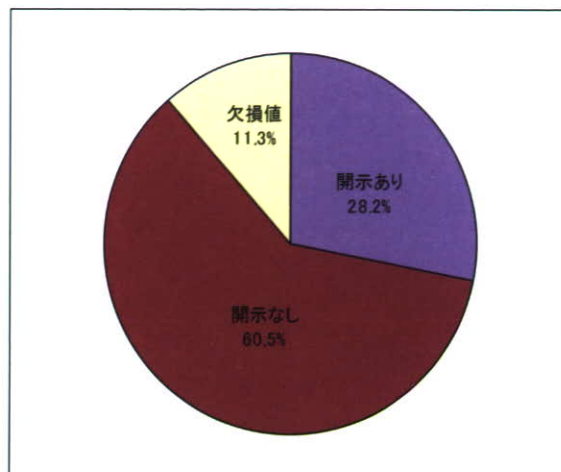


図 1-2 性的虐待疑い群の開示の有無

表 1-6 ケアの困難点と度数分布

	性的虐待群 (N=159)	性的虐待疑 い群(N=71)	対照群 (N=168)
対人距離の問題	26(16.4%)	11(15.5%)	1(0.6%)
性化行動	24(15.1%)	12(16.9%)	5(3.0%)
感情調整障害	21(13.2%)	20(28.2%)	11(6.5%)
虐待の人間関係の再現性・力による対人関係	20(12.6%)	26(36.6%)	29(17.3%)
感情抑圧・抑制	15(9.4%)	8(11.3%)	7(4.2%)
信頼関係の問題	12(7.5%)	2(2.8%)	2(1.2%)
整理整頓・身だしなみの問題	12(7.5%)	5(7.0%)	9(5.4%)
自傷行為	8(5.0%)	2(2.8%)	2(1.2%)
虚言	7(4.4%)	4(5.6%)	3(1.8%)
自信の欠如	7(4.4%)	3(4.2%)	3(1.8%)
反社会的逸脱行為	6(3.8%)	4(5.6%)	2(1.2%)
抑うつ症状	6(3.8%)	2(2.8%)	0(0.0%)
不安症状	5(3.1%)	2(2.8%)	0(0.0%)
解離性障害	4(2.5%)	12(16.9%)	0(0.0%)
悪夢・睡眠障害	3(1.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)
学校不適応	3(1.9%)	5(7.0%)	6(3.6%)
注意・多動の問題	0(0.0%)	6(8.5%)	3(1.8%)
その他の問題	22(13.8%)	18(25.4%)	36(21.4%)

表 2-1 性的虐待をはじめて受けた
年齢別の度数分布

年齢	N	%
0	1	0.6
1	0	0
2	2	1.3
3	5	3.1
4	3	1.9
5	9	5.7
6	4	2.5
7	4	2.5
8	11	6.9
9	15	9.4
10	9	5.7
11	9	5.7
12	9	5.7
13	8	5.0
14	3	1.9
15	2	1.3
16	1	0.6
17	0	0
18	0	0
欠損値	64	40.3
計	159	100

表 2-2 開示の年齢別の度数分布

年齢	N	%
0	0	0
1	0	0
2	0	0
3	0	0
4	3	1.9
5	5	3.1
6	3	1.9
7	7	4.4
8	9	5.7
9	9	5.7
10	17	10.7
11	13	8.2
12	10	6.3
13	12	7.5
14	19	11.9
15	6	3.8
16	4	2.5
17	2	1.3
18	0	0
欠損値	40	25.2
計	159	100

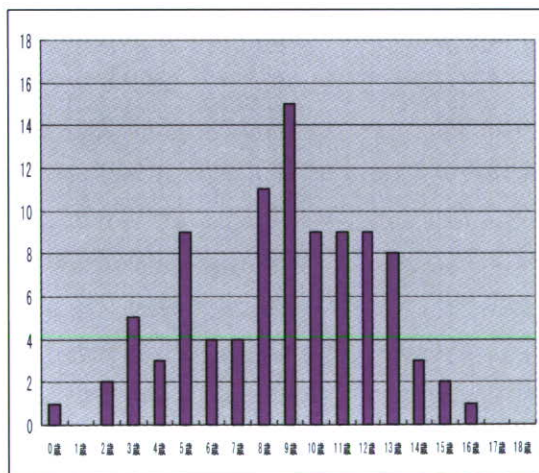


図 2-1 性的虐待をはじめて受けた
年齢別の度数分布

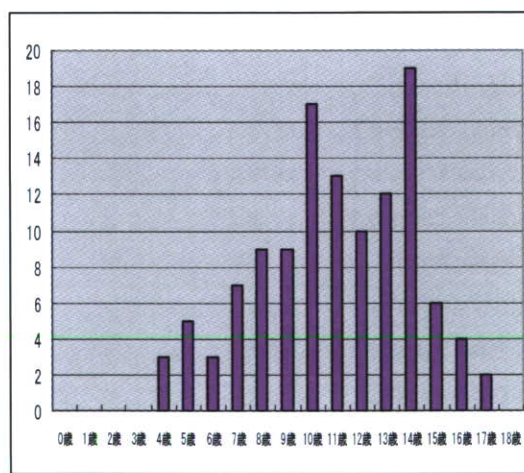


図 2-2 開示の年齢別の度数分布

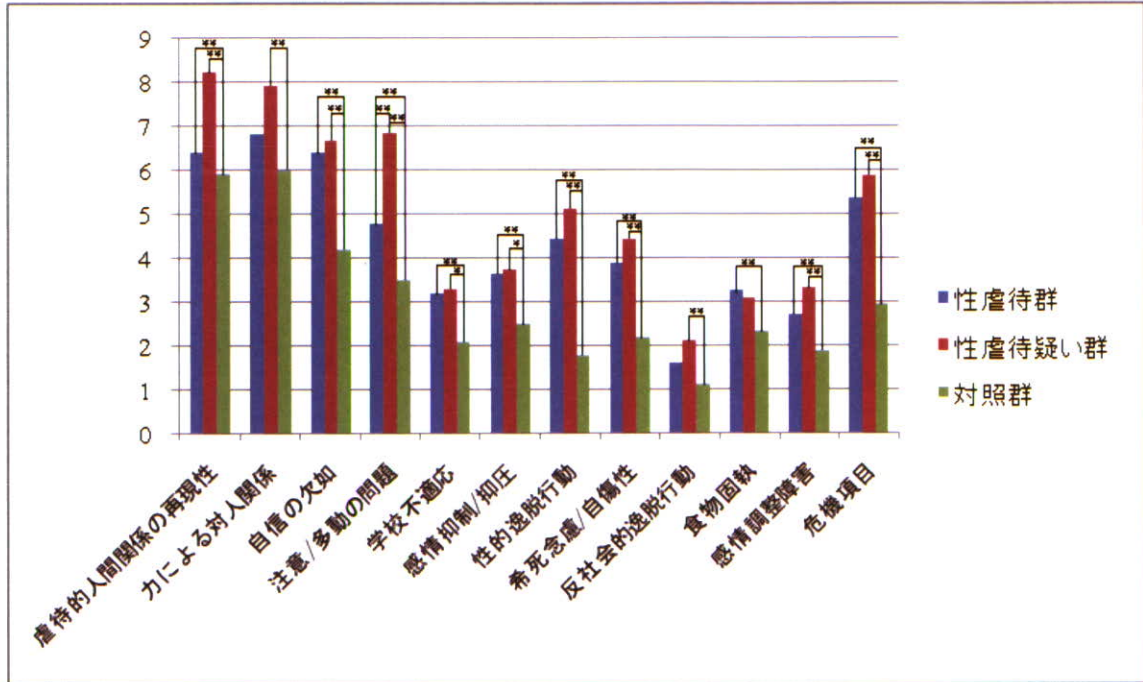
表 2-3 加害者と子どもとの関係と度数分布

	N
実父	54
養父・継父	41
母の内縁の夫・恋人	27
兄	10
祖父	8
施設入所男児	8
父母の知人	6
伯父・叔父	3
異父・異母兄	3
近隣住人	3
親戚	2
里父	1
実母	1
他人・見知らぬ人	1

表 3-1 各群の ACBL-R の得点平均と標準偏差および一要因分散分析結果

	性的虐待群 (N=159)	性的虐待疑い群 (N=71)	対照群 (N=168)	分散分析結果	多重比較 (Turkey 法)
総得点	46.91 (26.02)	54.97 (25.29)	33.66 (24.06)	F(2, 389)=21.34**	疑い, 性>対照
虐待的人間関係の再現	6.42 (4.90)	8.25 (4.92)	5.92 (4.89)	F(2, 389)=5.70**	疑い>対照
力による対人関係	6.82 (4.03)	7.93 (4.15)	6.00 (4.18)	F(2, 389)=5.61**	疑い>対照
自信の欠如	6.40 (4.04)	6.70 (3.74)	4.21 (3.72)	F(2, 389)=14.46**	疑い, 性>対照
注意/多動の問題	4.78 (3.86)	6.86 (4.28)	3.52 (3.41)	F(2, 389)=19.71**	疑い>性>対照
学校不適応	3.21 (3.39)	3.30 (3.93)	2.11 (2.87)	F(2, 389)=5.60**	疑い, 性>対照
感情抑制/抑圧	3.67 (3.37)	3.75 (3.42)	2.51 (2.77)	F(2, 389)=6.81**	疑い, 性>対照
性的逸脱行動	4.44 (4.16)	5.14 (3.73)	1.80 (2.90)	F(2, 389)=30.99**	疑い, 性>対照
希死念慮/自傷性	3.89 (3.83)	4.46 (4.13)	2.21 (2.57)	F(2, 389)=14.81**	疑い, 性>対照
反社会的逸脱行動	1.63 (2.55)	2.13 (2.76)	1.15 (1.87)	F(2, 389)=4.63**	疑い>対照
食物固執	3.26 (2.86)	3.10 (2.51)	2.33 (2.75)	F(2, 389)=4.98**	性>対照
感情調整障害	2.71 (2.47)	3.35 (2.79)	1.91 (2.14)	F(2, 388)=10.04**	疑い, 性>対照
危機項目	5.39 (4.89)	5.89 (5.00)	2.95 (3.72)	F(2, 389)=16.46**	疑い, 性>対照

*<.05, **<.01



* $p < .05$, ** $p < .01$

図 3-1 各群の ACBL-R の得点平均と多重比較

表 4-1 AEI-R 得点による各群の年齢度数と構成比

	性的虐待群 (N=229)	対照群 (N=141)
6~9 歳	37 (16.2%)	21 (14.9%)
10~12 歳	58 (25.3%)	48 (34.0%)
13~15 歳	84 (36.7%)	33 (23.4%)
16~18 歳	50 (21.8%)	39 (27.7%)

表 4-2 各年齢群の CSBI 項目の出現比率

項目	6-9 歳		10-12 歳		13-15 歳		16-18 歳	
	NSA 群 ¹	SA 群 ²	NSA 群	SA 群	NSA 群	SA 群	NSA 群	SA 群
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
1 異性の洋服を着る	15.0	5.7	4.7	16.4*	10.3	28.4*	15.8	25.0*
2 人の非常に近くに立つ	45.0** ³	57.1	37.2**	56.4	17.2	46.9*	21.1	45.8*
3 異性になりたいと言う	10.0	8.6	11.6	20.0*	13.8	16.0	5.3	4.2
4 人前で性的部位を触る	5.0	17.1* ⁴	11.6	10.9	0.0	2.5	0.0	4.2
5 手でマスターベーションをする	0.0	8.6*	0.0	7.3*	0.0	2.5	0.0	0.0
6 人の絵を描くとき性的部位を描く	0.0	8.6*	4.7	9.1	0.0	1.2	2.6	6.3
7 母親や他の女性の胸を触ろうとする	25.0**	28.6	16.3	23.6*	6.9	12.3*	5.3	10.4*
8 おもちゃや物(毛布、枕、プラスチック製品)で マスターベーションする	5.0	0.0	0.0	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0
9 他の子どもの性的部位を触ろうとする	0.0	8.6*	4.7	14.5*	0.0	7.4*	0.0	6.3*
10 他の子どもや大人とセックスしようとする	0.0	2.9	0.0	3.6	0.0	1.2	2.6	8.3
11 他の子ども・大人の性的部位に口をつける	0.0	5.7*	0.0	3.6	0.0	2.5	2.6	2.1
12 家(施設)で自分の性的部位を触る	5.0	20.0*	2.3	10.9*	0.0	1.2	0.0	2.1
13 大人の性的部位に触る	5.0	14.3*	2.3	10.9*	0.0	1.2	0.0	0.0
14 動物の性的部位に触る	0.0	2.9	0.0	1.8	0.0	1.2	0.0	0.0
15 性的声(ため息・うめき・深い声)を出す	20.0**	11.4	9.3	12.7	3.4	4.9	2.6	8.3
16 他の人に自分と性的行為をするように頼む	0.0	2.9	0.0	1.8	0.0	7.4*	0.0	4.2*
17 人や家具に身体をこすりつける	0.0	5.7*	7.0	12.7*	0.0	1.2	0.0	2.1
18 性器や肛門に物を入れる	0.0	2.9	0.0	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0
19 全裸の人や裸の人を見ようとする	0.0	25.7*	11.6	16.4	0.0	8.6*	0.0	0.0*
20 人形やおもちゃの動物がセックスしているよ うにする	5.0	8.6	4.7	7.3	0.0	2.5	0.0	0.0
21 大人に自分の性的部位を見せようとする	5.0	8.6	9.3	7.3	0.0	2.5	0.0	2.1
22 全裸の人や一部だけ衣服を身につけている人 の写真を見ようとする	0.0	8.6*	2.3	10.9*	0.0	6.2*	2.6	6.3*
23 性的行為の話をよくする	10.0	22.9*	14.0	18.2	3.4	22.2*	15.8	20.8*
24 よく知らない大人とキスをする	0.0	2.9	0.0	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0
25 大人がキスをしたり抱き合うとびっくりする	0.0	5.7*	4.7	9.1	6.9	4.9	0.0	4.2
26 よく知らない男の人と過度に親しくなる	10.0	28.6*	14.0	25.5*	13.8	21.0*	13.2	20.8*
27 よく知らない他の子どもとキスをする	0.0	8.6*	2.3	5.5	0.0	1.2	2.6	2.1

¹ NSA 群：対照群

² SA 群：性的虐待群

³ **：DRSB 項目

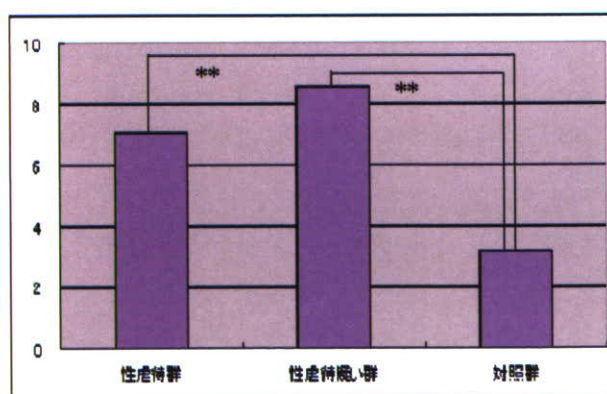
⁴ *：SASI 項目

28	いちゃついた話し方をする	0.0	20.0*	9.3	29.1*	10.3	23.5*	15.0	37.5*
29	嫌がっているのに他の子どもの衣服を脱がす (パンツを下ろす、シャツを脱がす等)	0.0	14.3*	11.6	12.7	0.0	6.2*	0.0	0.0
30	全裸やセックスのTVや映画を見たがる	0.0	8.6*	2.3	12.7*	3.4	7.4	7.9	14.6*
31	キスのとき自分の舌を相手の口に入れる	0.0	2.9	0.0	3.6	0.0	0.0	2.6	4.2
32	あまりよく知らない大人と抱き合う	10.0	22.9*	9.3	9.1	6.9	6.2	2.6	2.1
33	他の子どもに自分の性的部位を見せる	0.0	8.6*	4.7	5.5	0.0	4.9	0.0	2.1
34	誰か他の大人の衣服を脱がそうとする	0.0	5.7*	4.7	5.5	0.0	3.7	0.0	0.0
35	異性に大変興味を示す	20.0**	20.0	14.0	50.9*	24.1**	58.0	28.9**	41.7
36	母親や他の女性の胸に口をつける	10.0	11.4	4.7	5.5	3.4	0.0	0.0	2.1
37	同年齢の他の子どもより多くセックスについて知っている	15.0	20.0*	9.3	16.4*	3.4	22.2*	13.2	31.3*
38	その他の性的ふるまい	10.0	14.3	9.3	16.4*	0.0	17.3*	10.5	16.7*

表 4-3 各群の CSBI 総得点の平均と標準偏差および一要因分散分析結果

性的虐待群	性的虐待疑い群	対照群	分散分析結果	多重比較 (Turkey 法)
7.06(8.84)	8.58(10.12)	3.17(4.59)	F(2, 384)=16.39* *	疑い、性>対照

*<.05, **<.01



*<.05, **<.01

図 4-1 各群の CSBI 総得点の平均と多重比較

表 5-1 ケアワーカーの性別による各項目の群別平均得点と標準偏差および t 検定結果

	女性 CW		男性 CW			
	SA 群	NSA 群	SA 群	NSA 群		
1	この子にエネルギーを吸いとられてしまう感じがする	0.92(1.00)	0.83(0.90)	0.49(0.70)	0.61(0.86)	
2	この子を自分の思い通りに動かそうとしてしまう	0.60(0.76)	0.61(0.68)	0.34(0.61)	0.41(0.67)	
3	この子を助けられるのは私しかいない	0.40(0.52)	0.41(0.62)	0.28(0.48)	0.07(0.26)	**
4	この子がかわいいとは思えない	0.60(0.76)	0.39(0.58)	0.37(0.54)	0.46(0.60)	
5	この子のことよりも自分の用事を優先したいと思う	0.70(0.68)	0.67(0.63)	0.59(0.67)	0.41(0.55)	
6	施設から出てからもこの子の援助を続けたいと思う	1.27(0.87)	0.36(0.88)	1.09(0.90)	1.02(0.82)	
7	この子はわざと私を困らせようとしていると思う	0.75(0.98)	0.63(0.85)	0.31(0.60)	0.29(0.56)	
8	この子の側にいると落ち着かない気持ちになる	0.68(0.97)	0.43(0.65)	0.35(0.64)	0.46(0.67)	
9	この子の養育に疲れ果てている気がする	0.70(0.95)	0.52(0.66)	0.32(0.61)	0.49(0.81)	
10	この子が私の思い通りに動いてくれないと不安になる	0.34(0.58)	0.48(0.69)	0.32(0.53)	0.17(0.44)	
11	この子と一緒にいると、まるで恋人と一緒にいるような気持ちになる	0.04(0.20)	0.02(0.15)	0.09(0.29)	0.00(0.00)	*
12	この子が汚らしいと感じる	0.32(0.70)	0.13(0.50)	0.24(0.60)	0.05(0.22)	*
13	私以外の大人はこの子のことを理解していない	0.12(0.33)	0.13(0.34)	0.07(0.26)	0.02(0.16)	
14	この子が言ってもきかないときには、体罰を加えるしかない	0.03(0.16)	0.07(0.25)	0.07(0.26)	0.05(0.31)	
15	できるなら、この子の面倒だけを見ていたい	0.11(0.36)	0.26(0.57)	0.10(0.31)	0.10(0.37)	
16	この子のことを、実際の年齢よりも高く見てしまう	0.42(0.83)	0.20(0.50)	0.32(0.63)	0.12(0.40)	*
17	この子には、いくらしてあげてもきりがないと感じる	0.78(0.98)	0.74(0.91)	0.47(0.74)	0.54(0.87)	
18	この子が私の思い通りに動いてくれないと腹が立つ	0.51(0.78)	0.70(0.76)	0.28(0.54)	0.32(0.65)	
19	この子が他の職員と親しくしているのを見ると嫌な気持ちになる	0.14(0.38)	0.17(0.44)	0.09(0.29)	0.02(0.16)	
20	この子が気持ち悪いと感じる	0.22(0.53)	0.07(0.33)	0.16(0.44)	0.00(0.00)	**
21	この子がいなければ、もっと楽になると感じる	0.68(1.03)	0.35(0.60)	0.29(0.60)	0.40(0.78)	*
22	この子は私がいないとやっていけないと思う	0.18(0.39)	0.22(0.59)	0.09(0.29)	0.02(0.16)	
23	この子が私を馬鹿にしているように感じる	0.27(0.63)	0.30(0.76)	0.29(0.60)	0.24(0.49)	
24	この子といると、エネルギーが涸れてしまう気がする	0.60(0.93)	0.41(0.69)	0.28(0.59)	0.17(0.44)	
25	この子が思い通りに動いてくれないと施設職員としての自信がなくなる	0.19(0.43)	0.22(0.47)	0.31(0.58)	0.17(0.50)	
26	この子がいるために、私自身の楽しみが奪われた気がする	0.25(0.68)	0.15(0.56)	0.10(0.31)	0.05(0.22)	

27	この子が言うことをきかないのは、この子が私のことを尊敬していないからだと感じる	0.19(0.46)	0.28(0.66)	0.22(0.62)	0.32(0.82)	
28	この子に関わっていると私自身のエネルギーの補給ができない	0.37(0.74)	0.24(0.67)	0.12(0.37)	0.02(0.16)	
29	この子が私の思い通りに動いてくれないと、この子に馬鹿にされているように感じる	0.08(0.28)	0.13(0.34)	0.24(0.58)	0.22(0.42)	
30	この子の養育に関しては誰にも口出して欲しくないと思う	0.01(0.12)	0.07(0.25)	0.07(0.26)	0.00(0.00)	*
32	この子が一日中一人で過ごしてくれればいいのにと感じる	0.33(0.71)	0.37(0.68)	0.24(0.63)	0.22(0.61)	
33	この子には、他に方法がなければ、体罰を用いるしかない	0.04(0.20)	0.04(0.21)	0.07(0.26)	0.10(0.38)	
34	この子のためなら、勤務時間外でも労を惜しまない	1.13(0.89)	1.43(0.81)	0.91(0.81)	0.85(0.85)	
35	この子の側にいると、穏やかな気持ちになる	1.06(0.88)	1.41(0.78)	* 0.84(0.78)	0.93(0.96)	
36	この子は私に対して悪意を抱いているような気がする	0.40(0.62)	0.24(0.57)	0.15(0.36)	0.05(0.22)	
37	この子が思い通りにならないと、周囲から「だめな職員」だと思われてしまう気がする	0.24(0.52)	0.26(0.53)	0.19(0.47)	0.17(0.50)	
38	この子と一緒にいると、楽しい気分になる	1.38(0.83)	1.63(0.80)	1.01(0.80)	1.17(0.95)	
39	この子さえいなければ私の仕事はもっといい方向に進んでいると思う	0.44(0.79)	0.20(0.46)	* 0.19(0.47)	0.15(0.42)	
40	この子が言うことをきかないのは成長に伴う健康的な自己主張の現われだと思う	1.40(0.96)	1.24(0.92)	0.93(0.80)	0.90(0.94)	
41	できればこの子には関わらずに過ごしたい	0.45(0.82)	0.26(0.65)	0.16(0.37)	0.24(0.58)	
42	この子が食べるのを嫌がると、私のことを好きではないのだと感じる	0.14(0.45)	0.17(0.53)	0.09(0.29)	0.07(0.35)	

*<.05, **<.01

表 5-2 各群において子どもの年齢層別 PAAI-CH 得点の t 検定で有意差のあった項目

	女性 CW	男性 CW
6~9 歳	34(-)*, 40*	39(-)*
10~12 歳	2*, 22*	3**
13~15 歳	16*, 30*	8(-)*, 11*, 19*, 20**, 22*, 26*, 30*, 31*, 36*, 38(-)*
16~18 歳	なし	9(-)*

*<.05, **<.01

(-) : 対照群>性的虐待群、それ以外の項目 : 性的虐待群>対照群

表 5-3 各群においてケアワーカーの年代別 PAAI-CH 得点の t 検定で有意差のあった項目

	女性 CW	男性 CW
20 代	18(-)*, 40*	3*, 5**, 7*
30 代	2*, 12*, 16*, 20*, 22*, 28*, 35(-)*, 3 9*	10*, 11*, 19*, 20*, 22*, 23**, 35**
40 代	1*, 3*, 7**	なし
50~60 代	2(-)*, 10(-)**, 18(-)**	5(-)*

* $<.05$, ** $<.01$

(-) : 対照群>性的虐待群、それ以外の項目 : 性的虐待群>対照群

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究
（主任研究者 奥山眞紀子）

分担研究報告書

分担研究者 青木 豊 相州メンタルクリニック中町診療所院長

『被虐待乳幼児に対する愛着に方向付けられた治療についての研究』
—被虐待乳幼児の発達—特に愛着の形成に関する研究

研究要旨

本年度（H19年度）は、乳児院及び児童養護施設において、昨年度作成した愛着に方向付けられた養育・介入プログラム（愛着プログラム）を被虐待乳幼児に実施した。また正常対照として、保育園において愛着行動チェックリスト ABCL などを使用して、乳幼児の発達を調査した。

本研究の目的は、被虐待児に対する「愛着に方向付けられた介入（愛着プログラム）」の効果を判定することである。本年度の愛着プログラム施行時の被虐待乳幼児の愛着や問題行動などの適応化の程度と、昨年度の通常養育による変化の程度とを比較することで、愛着プログラムの効果を調査する。現時点（H20年2月20日）でプログラム終了後の調査を回収中であるために、この大目的である乳幼児の行動変化の効果判定は、今後の課題となる。このプログラムの効果判定の第2の側面が、施設職員の変化についての調査である。この変化を計測するため、本年度職員に対するいくつかの質問紙を通年で行なった。その結果、概ね職員は本プログラムにより愛着の知識を得たと考えており、また担当の児童に対する陰性の感情と育児ストレスとが軽減していた。これら結果は、愛着プログラムの有効性の一部を示すと考えられる。また本研究の要となる検査が、H17年度に本研究で作成した愛着行動チェックリスト ABCL である。このため本研究の主要な目的の1つは、ABCL の信頼性・妥当性を検討することである。昨年度 H18年4月データで ABCL の因子分析、他の問題行動との相関の分析により既にこの検討を行った。本報告書では、昨年度報告書に入れ込むことのできなかつた施設での H19年3月調査と、本年度実施した正常対照の調査—保育園児への調査—とから、ABCL の信頼性・妥当性に貢献できる多くのデータを得た。例えば ABCL により測定した乳幼児の愛着の適応度が、正常対照群（保育園児）の親への愛着、正常対照の保育士への愛着、施設児の職員へ愛着の順であったなどの結果である。

研究協力者

奥山眞紀子 国立成育医療センター
南山今日子 相州メンタルクリニック
中町診療所・お茶の水女子大学大学院
芝 太郎 ドルカスベビーホーム
阿部伸吾 唐池学園
吉松奈央 相州メンタルクリニック
中町診療所
鈴木浩之 神奈川県児童相談所

福間 徹 神奈川県児童相談所
佐々木智子 神奈川県児童相談所
寺岡菜穂子 相州メンタルクリニック
中町診療所
猪股誠司 東海大学医学部
早川典義 東海大学医学部
松本英夫 東海大学医学部

A. はじめに

本年度（H19 年度）は、乳児院及び児童養護施設において、昨年度作成した愛着に方向付けられた養育・介入プログラム（愛着プログラム）（青木，H18 年度報告書）を被虐待乳幼児に実施した。また正常対照として、保育園において愛着行動チェックリスト ABCL などを使用して、乳幼児の発達を調査した。

本研究の目的は、被虐待児に対する「愛着に方向付けられた介入（愛着プログラム）」（青木，H18 年度報告書）の効果を判定することである。本年度の愛着プログラム施行時の被虐待乳幼児の愛着や問題行動などの適応化の程度と、昨年度の通常養育による変化の程度とを比較することで、愛着プログラムの効果を調査する。現時点（H20 年 2 月 20 日）でプログラム終了後の調査を回収中であるために、この大目的である乳幼児の行動変化の効果判定は、今後の課題となる。このプログラムの効果判定の第 2 の側面が、施設職員の変化についての調査である。愛着プログラムの方法は、研究グループが直接被虐待児に治療するのではなく、職員の愛着に方向付けられた養育を強化することを通して被虐待乳幼児の愛着の適応化を図るという方法である。そのために職員の変化は、このプログラムの効果の 1 側面となる。この変化を計測するため、本年度職員に対するいくつかの質問紙を通年で行なった。その結果、概ね職員は本プログラムにより愛着の知識を得たと考えており、また担当の児童に対する陰性の感情と育児ストレスとが軽減していた。これら結果は、愛着プログラムの有効性の一部を示すと考えられる。

また本研究の要となる検査が、H17 年度に本研究で作成した愛着行動チェックリスト ABCL である。というのも ABCL は愛着プログラムで最も重要な道具の 1 つとして用いられ—研究グループと施設職員のケースカンファレンスで中心的に用いられる—、更にはプログラムの効果判定にも使用するためである。このため本研究の主要な目的の 1 つは、ABCL の信頼性・妥当性を検討することである。昨年度 H18 年 4 月データで ABCL の因子分析、他の問題行動との相関の分析により既にこの検討は始まっている。本報告書では、昨年度報告書に入れ込むことのできなかった施設での H19 年 3 月調査と、本年度実施した正常対照の調査—保育園児への調査—から ABCL の信頼性・妥当性の検討を更に進めた。結果 ABCL

の信頼性・妥当性に貢献できる多くのデータを得ることができた。

以下、まず

- I. 愛着行動チェックリスト ABCL（以下、ABCL とする）の信頼性・妥当性について、
- II. 愛着プログラムの実施とその効果について（プログラム内容は総合報告に詳しく記載する）、の順に報告する。

目次

I. 愛着行動チェックリスト ABCL の信頼性・妥当性の検討

[1] 乳児院・児童養護施設での調査

- 1) 評価 2（2007 年 3 月）の ABCL の因子分析
- 2) 施設における通常養育による職員への愛着の変化
- 3) 施設における通常養育による問題行動の変化

[2] 正常対照群（保育園）と施設入所児との比較

- 1) 施設入所児の担当職員に対する愛着と、保育園の親および保育士への愛着の比較
- 2) 保育園での愛着と問題行動の関連
- 3) 保育園におけるその他の結果

[3] まとめ

II. 愛着プログラム

[1] 実施

- 1) 実施経過
- 2) 症例スケッチ

[2] 職員の変化

[3] まとめ

B. 方法・結果・考察

I. ABCL の信頼性・妥当性

[1] 乳児院・児童養護施設での調査

1. 対象と方法

（詳しくは H18 年度報告書参照）

1) 対象：

対象児は 2006 年 6 月 1 日現在で月齢 10 ヶ月から 50 ヶ月の施設入所児約 85 例（神奈川県内の乳児院 2 施設・児童養護施設 5 施設）と、その後施設に 2006 年 12 月 31 日までに入所した同月齢範囲の児童合わせて 109 名である。平均月齢は 24 ヶ月（SD. 11 ヶ月）であり、

レンジは 10-48 ヶ月であった。入所平均月齢は 24 ヶ月 (SD. 12 ヶ月) であり、レンジは 1-48 ヶ月であった。男子 65 名、女子 44 名、乳児院 49 名、児童養護施設 60 名、虐待の有無は、有りが 45 名、無しが 64 名で、内訳は身体的虐待が 15 名、ネグレクトが 26 名、心理的虐待が 1 名、DV の目撃が 4 名であった (複数回答あり)。

2) 方法:

2006 年 5 月 1 日より 1 ヶ月内 (評価 1) に、上記対象に対して、施設担当者により以下の検査・質問紙を行った。

① 児童の個人票: 13 項目の質問から構成されている。児童の家族背景やリスク因子が記録される (青木, H18 年度報告書)。

② 愛着行動チェックリスト (ABCL): 施設担当者に対する乳幼児の愛着行動を調査することを目的として、2005 年度にわれわれ分担研究班により作成された。Waters らの開発した Q-sort 法 (1985) の項目で、愛着の construct に関連の強い 40 項目から、施設で利用可能な 29 項目を選び、質問項目とし、5 件法によるチェックリストとして開発された (青木, H18 年度報告書)。

③ 新版 K 式発達検査 (同検査は被虐待児のみ): DQ 測定のため児童相談所心理士により施行された。同検査は、対象児の担当児童相談所に所属する新版 K 式施行に習熟した心理士により実施された。

④ 子どもの行動チェックリスト 1.5-5 歳用 (the Child Behavior Checklist, 以下 CBCL, Achenbach & Rescorla, 2000; 児童思春期精神保健研究会訳, 2002): 乳幼児の問題行動を評定するために用いる。CBCL は米国においては信頼性・妥当性が確立されている質問紙で、100 の項目からなり内向尺度、外向尺度、総得点で構成される。同チェックリストはわが国において翻訳はされているが、いまだ十分な信頼性・妥当性の検討および標準化がされていない。本研究では、この邦訳版チェックリストの信頼性・妥当性の検討も行うこととなる。以下、検定を行う際、すでに標準化されている 2-3 歳用の CBCL 集計表をもとに共通する項目を選択分類して 1.5-5 歳用 CBCL

集計表を作成し、検定を行った。両者の同集計表は「内向尺度 (29 項目)」と「外向尺度 (31 項目)」の 2 つの下位尺度からなり、各項目の和の平均をその得点とした。

⑤ 子どもの行動チェックリスト (以下、CMTI) (6 ヶ月から 2 歳未満用、および 2 歳から 6 歳用: 平成 15 年度厚生労働省科学研究、奥山班): 特に被虐待児などの乳幼児の問題行動を検査するチェックリストで、6 ヶ月から 2 歳未満用は 27 項目、2 歳から 6 歳用は 82 項目の質問から構成されている。

⑥ 愛着障害チェックリスト (以下、ADCL): DSM-IV の反応性愛着障害 (1994) と Zeanah らの愛着障害 (1998) をチェックするために、2005 年度にわれわれ分担研究班により作成された。Zeanah らが開発し我々のグループで翻訳された DAI: Disturbance of attachment interview 愛着障害面接から、同チェックリストを作成した。

2007 年 3 月 1 日から 1 ヶ月内に (評価 2) 上記と同様の検査を行う。

2006 年 6 月 1 日から 2007 年 3 月 1 日までに、途中入所した入所時 10 ヶ月から 50 ヶ月の乳幼児に、入所から 1 ヶ月内に、評価 1 と同検査を行い (評価 1'), その後身長・体重・頭囲を計測する。

上記全ての児で、2006 年 6 月 1 日から 2007 年 3 月 1 日までに途中退所する児については、退所前 1 ヶ月内に評価 1 と同様の検査を行う (評価 2')。

<倫理的配慮>

国立成育医療センター情報の二次利用委員会の承諾を得た。

2. 結果:

1) 評価 2 (2007 年 3 月) の ABCL の因子分析

第 2 回目を同様に因子分析した結果 (最尤法、プロマックス回転)、同様の内容の 3 因子が抽出され (表 1)、第 1 回目結果の因子との相関も有意な結果が得られた ($r=.541, r=.414, r=.478, p<.01$)。

表2 ABCLの比較結果

	人数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
心の理解	105	3.38	0.99	104	-7.004 **
		3.96	0.68		
非安全の愛着	107	3.50	0.81	106	1.080
		3.41	0.84		
安全基地	107	3.93	0.89	106	-3.926 **
		4.24	0.64		

**p<.01

表3 ADCL比較結果

	人数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
AD1	99	0.81	0.40	98	-2.634 *
頼りにしている大人がいる	99	0.93	0.26		
AD21	106	1.50	0.73	105	4.705 **
けがの時、特定の大人になぐさめてもらいに来る	106	1.19	0.44		
AD22	105	1.12	0.36	104	1.808
けがをして、特定の大人のなぐさめを受けいれる	105	1.05	0.25		
AD23	106	2.90	0.36	105	-0.470
A いつもイライラ、悲しそう	106	2.92	0.28		
D AD24	106	2.60	0.63	105	0.779
C 見知らぬ人にもついていく	106	2.56	0.66		
L AD31	105	2.71	0.55	104	2.051 *
自分で危ないことをする	105	2.58	0.69		
AD32	106	2.21	0.76	105	0.807
見知らぬ人がいると特定の大人から離れない	106	2.14	0.76		
AD33	105	2.94	0.23	104	0.470
特定の大人の機嫌をうかがう	105	2.92	0.33		
AD34	106	2.58	0.67	105	0.773
特定の大人を気かけ、なぐさめる	106	2.53	0.68		

**p<.01、*p<.05

3) 施設における通常養育による問題行動の変化

評価1と10ヵ月後の評価2との問題行動の変化を評価するため、CBCL、CMTIにおいて第1回調査結果と第2回調査結果の平均値の差の検討を行い、対応のあるT検定を行った。

その結果、「CMTI トラウマ (t=3.192、df=85、p<.01)」において有意な差があり、第1回より第2回の方が得点が下降していた(表4)。問題行動のうち、トラウマ尺度のみに改善が見られた。

表4 CBCL、CMTIにおける比較結果

	人数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
C 内向平均	109	0.15	0.21	108	-0.693
B		0.17	0.22		
C 外向平均	109	0.32	0.37	108	-0.132
L		0.32	0.40		
トラウマ	86	1.53	0.47	85	3.192 **
C		1.37	0.47		
M 愛着	90	1.43	0.26	89	-1.174
T		1.47	0.33		
I 感覚・行動・調節	86	1.62	0.47	85	-0.442
		1.64	0.45		

**p<.01